

帝國大學教授正七位內藤耻叟先生校訂

詩學逢原  
魯西亞志

東京博文館藏版

## 魯西亞志

## 解題

魯西亞の國たる我か隣近の強國にして寛政文化の間より侵軼の勢大に畏るべきを以て我邦の學者意を其國勢に注く者尤多し此書は其時にありて桂川甫周の著す所甫周は幕府の醫官にして蘭人の書を讀頗る外事に明かなるを以て聞ゆ其名亦魯英に聞ゆと云ふ此書は蓋魯國の大勢を畧舉して以て當路に上る者なり今日に於て固より陳腐に屬すと雖も故人用心のある可を見るべきか故に今之を掲ぐ之を采覽異言邊要分界圖考等に參觀して可なり



魯西亞志目錄

名義

幅員

海河

隣界

風土

分界

シベリ 名義 幅員 隣界

河

風土

併有

分界

魯西亞人物

魯西亞志目錄

教法

習業

政治

兵制

交易

以上

# 魯西亞志

三百十一

桂川甫周國瑞譯

## 名義

魯西亞は往古沙爾馬齊亞と稱せし國也千餘年前にスラホニヤに翁加里亞國の地なり三人の諸侯あり其

名をセクス、レクス、ロシス、といふコロシイ翁加里亞國の地より分れて各王爵の國となる即今の波赤

米亞セルマニボロニア波羅泥亞魯西亞也ロシスの開きたる國なれば其祖王の名を以て其國に名付し也

亞國の地

土俗はロスランド又レウスランドと稱す皆魯西亞の轉訛也或は其開國の始め及び國の名義

詳ならずといふ説あれ共コロシイより分れてロシスの開きたる國なる故に其名を以て國名

とせし事疑なし

魯西亞開國以來漸々に張大に成て其國人を三部に分ち各其服色を殊にして是を三州と爲す

其一をローデロス赤魯西亞の義なりランドといふ波羅泥亞ボロニアの一部の地也其説は波羅泥亞の下に載す其

二をウイッテロス白魯西亞の義なりランドといふリタウウエンの波羅泥亞國の地地也今ハスモールレンスコの所

屬と成其三をスワルトロスラント黒魯西亞の義なりといふ魯西亞の本國にて即モスコウ莫斯科未亞也但モスコウ莫斯科未の名は何の義なる事を詳にせず其都城の地をモスコウ莫斯科可烏といふを以て其國をもすへてモスコウ莫斯科未亞と稱する成べし今此赤白黒の三州を合せて單に魯西亞と稱するは年曆千七百二十一年享保六年より始て帝號を稱せしビートルといへる帝より也

## 幅員

魯西亞の本國は長さ六百餘里其廣さも大抵相同し近來亞細亞州の大韃靼の北邊を侵掠し漸々に廣大の地と成て往古とは其幅員幾倍なる事を知らず其上近頃スウエーデン雪際亞の地を併せ得てより其地の廣大強盛なる事世界に是に衡を争ふべき國なしといふ

## 海河

歐羅巴洲ロバの寰海十名有其内五名魯西亞の境國に係る者を左に擧ぐ

窩々所德海カ、スケギ 一名伯爾昨容海ハルサセ 雪際亞國スウエーデンの海灣をいふ

白海ウイテセ 蠟皮亞ラフランドの海灣をいふ

冰海エイスケ 北極界にあり

スハルチゼイ 度爾格の堺にあり

カステギ 百爾西亞の堺にあり

右の外大河五

テブアル 一名デ子ーブル河リタウウエン波羅泥亞の間に其源ハスモーレンスコの北ウ

ナルコンスキの池澤の間より發して南に流て黒海に入る河口の廣さ四里其中に多く小嶋有各林木茂盛也河のすゑ貳十里餘の間に瀑布の如くなる所十三所有然れ共皆船にて越へし本國に度爾格と此所にて數度合戦ありし也

ウラルガ 勿爾瓦河 其河源は池澤より出尼布爾河と同じ西より東に流れ魯西亞國中を経て亞私太蠟甘の地より北高海に注く此河水春毎に大に漲り發す此時テウエルウエルの地より貨物を大船に積て亞私太蠟甘ヤスカラカンに送運す

メナイ 太乃河 一名ドン河其源ハレサンの地より出て小韃靼を経て迂曲し墨何的湖メナセより黒海に入る此河底沙多く水淺し亦春の頃水の漲發する事勿爾瓦河に同じ其時に大船を用ひて諸物を運送するなり



杜亦拿河<sup>トウイフ</sup> 其源一ならずアルカングルの地に至り二派に分れて白海に注ぐ

阿比河<sup>アビ</sup> 北氷海に注ぐ甚深く底は皆砂也魯西亞にて單に大河と稱するは此河を指す也加爾<sup>カール</sup>莫奇<sup>モックシ</sup>ベレソウの地に至りては河中に多く島あり

本國始て帝號を稱せし第一世ピイトルと言し帝チ子ガ湖ラドカ湖の間凡十六七里尾闕にて相通したりしを鑿開きて河道を通し商船の通行に便ならしめ萬世の利を發き給へりされば其功德なる事此河流とともに永世に傳て息さる也

### 隣界

北は雪際亞西は波羅泥亞南は度爾格東は大韃靼と堺を接す近時亞細亞洲の北邊を吞併せしより支那<sup>ハルシヤ</sup>百爾西亞とも其堺を交ゆ

### 風土

此邦幅員廣大にして數百里に亘る故に其氣候の寒暖土地の肥瘠も又一様ならず此に其大較を擧ぐ

西の方波羅泥亞に堺する地を最豐饒なりとす米穀を出すの地凡二十州穀の類三十餘品通國

の糧に供するのみならず多く近隣の諸國に輸す

北方の地は氣候極めて冷に亘寒異常地も又甚卑濕也多くは茂林池澤のみにて其間野獸きはめて夥し土人は多く江海に浮て魚獵を事とす畜産もつとも盛也亦ウールナスレンヂイルマルデルス白狐玄狐サベルス狐に似て小きなり其皮班文きはめて美しベルメレー子馳の等を産す此を以て革を製す最上好也其價も頗貴し其産所は一所にかきらす

ロスマカ一名ベールフラートといふ獸あり其性甚食を貪り物を喰ふ事口をたへす終に飽滿て舉動する事不能死するか如くなるに至る時に林の内に入て二木の間に其身をはさみ食たる物をおして吐出し亦再び食ふ事初めの如し又韃靼海濱に異獸あり其名ペヘモットといふ其齒甚た大にしておろろしけ也磨光すれば潔白□□にて美はしき象牙にまさる江海の中魚蝦もつとも盛也乾腊して諸方の學校にふくり生徒の食用に充つ但鯉鮪の屬甚まれ也果實の類はあらざる物なし瓜の大なる物重さ三四十斤に至る物有葡萄もと至て稀也ペトル帝の時レイン、ムーセルの兩河邊より移し來り諸方に植たりしに亞私太蠟甘の地に相應して他所よりも多く繁衍せりるれより多く美酒を造り出す本國には植たれ共蔓延せず

木綿蠶絲は最多し故に種々の織物を製して交易の料とす

此邦交易第一の諸品は皮革牛皮醃肉牛脂蠟燭苧麻蜜蠟等なり此を以て莫大の交易を爲す

### 分界

魯西亞の併せ有所歐羅巴亞細亞二大洲に亘る今分て五部とす

第一 インゲルマンランドレイフランド禮勿泥亞舊雪際亞の地なり今魯西亞に併せらる

○第二 ウエスト西魯西亞即本國の西方一分の總稱也○第三 オナスト東魯西亞即本國の東一分の總稱なり

○第四 魯西亞蠟皮亞ラフランド○第五 魯西亞韃靼タタール

右五部の内縣府を建酋長を置所十二所

一 ノボゴロド諾勿瓦的亞 二 アルカンゲル 三 謨斯可鳥 四 ニスノウゴロド 五 スモーレ

ンスコ 六 キウチウ 七 ビイロゴロド 八 ウチロ子ス并にアソウ 九 亞私太蠟甘

十 チレンブルダ 十一 加山 十二 シベリイ

インケルマンランド一名インゲルメルランド地はヒンランドの海灣とラドカ湖との間にあり幅員六十餘里地頗豐饒にして獸畜も又盛也百五十餘年前は魯西亞の有たりしに中頃雪際

亞に從ひ千七百二年元祿十に再五年ひ魯西亞に併せらる翌年此地に初て王城を建起すペテル帝の建られたる都なる故ペテルスベルクと名付く

ペテルスベルク インゲルマムランドの首縣にて魯西亞第一の宏麗繁盛の地也北陸六十六度西鐵島ヘツコエイランドを離る事四十八度王城の廣さ方二里許其内に大厦八千餘あり本城をはハガといふ河の内に三つの島を合せて長めに六稜ガクに築きたり第一の島をハーセンエイランドといふ對岸の陸地に外廓を構へて門の上にペテル帝の肖像を安す總石垣の高さ三丈餘めくり鐵襦銅の大銃カウガキを隙なく列ね城内には寶塔を建起す是意太里亞國の良匠ラレシニなる者の造りし也屋瓦は皆金貼キセ也塔上に自鳴鐘を掛く毎時かのつから鳴て時を報し又自音響を奏す之和蘭のアムスデルダムにて造れる也其他湧樓飛閣創建美を極め誠に言語の及はざる處也此より後代々帝の廟陵も此所に定られたり然るに彼寶塔千七百五十六年寶曆六年に天火にて過半燒失たり又學校藥局を設け各々壯麗をきはむ藥局には尋常の用藥は勿論外國異邦の珍貴の品類迄も備はらざる者なく器は皆支那の磁器を以て收め貯ふ第二の島をアドミオリツ島といふ五稜に廓を構へ四方に大銃を列ねて固めとなし内には樓閣を建て

つらね夏日暑を避る所とす側に大なる園を開き其内に種々の水戯カラシメ或は噴水等を設たり千七百五十五年寶曆五年に四層の高樓を造り悉く畫棟綵梁金碧目を奪ふ實に天下の偉觀也又馬廐象廐を列ね皆百爾西亞國產の之を參養□□息せしむ其他鑄工冶工舟匠冑甲匠書肆有用の百工備はらざる物なし第三の島をワシリナストローウといふ街を十二條に分て往來を通し浮梁を以て二島に渡る浮梁の長六百餘間ペテル二世の帝の造られたる也海に望んで園を開き宮室を建てわたり壹里半許風景絶勝れたり海岸に臺を築き夜は臺上に篝を焚て行海の者を照す又大庫を造りて貨物を貯へ三ヶ所に藥局を建學校に設く但此地ナルガヲドガ兩湖の間河道窄隘にして大船を通し難きに依て食糧も常に乏し交易の便りもあしかりしにペトル帝の詔にて千七百十八年享保三年より工を起し兩湖の間十六七里の程を廣さ七丈深さ二丈に河道を鑿開く凡一十四年を経て千七百三十二年享保十年女帝アナの時に至りて成就せり開河の丁夫二萬四千人を用ひらる是なり諸物の運送心のまゝなるにより土地の繁盛富庶なるは言に及はず近隣の諸國も其餘澤をかうひらざるはなし萬世其事業の大なる德澤のあつき事を仰かざる者なし

禮勿泥亞北はヒンランドの海灣にのりみ西は窩々所德海に際し南はコウル、ランドに接し

東はプレスコウ諸爾勿入亞に接す南北わたり百餘里東西六十餘里其地甚肥沃にして最諸穀

によるし故に西土の諺に北方の穀嘗と稱す又多く過臘魚比目鱈梭魚狼熊エランツ、レンヂ

ール鹿兎を産す畜産も亦他の諸邦に減せず但羊毛は甚下品也材木は松樅櫟最多し故に土人

多く木のみにて屋を造る西洋の屋室多く石或は磚ねり土を用ふ故に殊に木のみを用ゆる事をいふ近百年來は漸々に林を伐開きて田畑と

なしたり交易の貨物は 大麻 苧麻 瀝青 諸蠟 蜜 ホットフス 皮革等也

西魯西亞此地分て二十三道と爲す所謂

謨斯可烏 テウエル ロストウ ヤレスラウ ビーロチーセロ シユスダル 縛羅得抹

爾 以上七道中土にあり

フスコウ ビールスキ レスコウ スモレンスコ セハリイ ケセルニコウ ユクタイ

子 以上七道西方にあり

諾勿瓦的亞 カルガボル 杜亦拿 以上三道北方にあり

縛羅答 ニスノホゴロド モルトア 以上三道東方にあり

ウチロチン レサン ポル 以上三道南方にあり

謨斯可烏<sup>モスコウ</sup> 魯西亞の中土にあり其首縣を即ムスコウといふムスクワ河邊にあり北極五十五度三十六分の地也千二百年の頃より魯西亞王の居城にて歐羅巴第一の大城也周圍十餘里居人凡十五萬其内を四つに分ち各石垣を築き溝をほりて固めとなす皆赤き石にて砌成す三層の城樓を建ならへ溝をは煉土にて築固めたり又園囿を設け大榭高樓皆五色を以て彩り多く噴水を造りて景勝を佐く又六の寺あり第一をリボルといふ寶塔九坐皆鍍金の銅瓦を用ひ門戸は皆鍍金の鐵板を用ゆ故に日光に映して光輝燦爛として眼を射る第二をシントミシールといふ魯西亞王の廟所也第三は諸王后妃の寺也此一かまへをビシ子ンスタードといふ内街といふ語也第三の構へをキタイゴロドといふ又支那街と稱す四圍は石垣高くとみなし圓形方形の敵樓を數多建列ね屋室は皆美石を以て砌成せり又石橋を架しピン子ンスタードに往來す其橋の製造極て精巧を盡したり内に武庫學院書肆藥局を設く藥器は皆玉石等を用ひ最善美を盡せり交易の大廓六千餘所專支那の貨物を取捌く故に支那街と稱するなり第三をヘルゴロドといふ又白街と稱す周圍白石を以て石垣を造りたる故に名付たる也城の形半月

の形の如く其内に百工商賈備らざるものなし又木匠専ら木を以て屋を造る事を習ふ者あり御厩銃を製る所其他旅舎家店等あり此街にて釀たるビール酒の名麥にて造るもつとも上品味甚美也第四はセメラメイゴロドといふ□□堤を築き立二つの石門有度數測量の學校あり此所屋室皆木を用ふ故に時々火災有

テウエル 勿爾瓦河源にあり舊別に酋長有今は諾勿瓦的亞ノホゾロダの所屬となるベトル帝のテウエルサセナ兩河を繋通し給ひてより今は黒海北高海より窩々カ、ステヤ所德海に船を通る事を得るなりロストウ 謨斯可鳥の北にあり豊饒の地なり

ヤレスラウ 勿爾瓦河岸にあり

ヒイロチーセロ 勿爾瓦河の西北にあり古は別に君長ありし今は諾勿瓦的亞に屬す

シユダル 亦勿爾河沿岸にあり

縛羅得抹爾チロシメル 勿爾瓦オカ兩河の間にあり少し諸穀を産す今謨斯可鳥に屬す

フスコウ 禮勿泥亞レイフフシヤと堺を接す千五百四年永正元年より本國に屬す

ピイルスキ 波羅泥亞ボロニヤの堺にあり



レスコウ リタウウエンの堺にあり

レモールンスコ リタウウエンに堺す年來本國波羅泥亞と此地をあらそひて數度合戦有千

六百八十六年貞享三年より本國に屬し縣を建酋長を置

セヘリイ 亦リタウウエンの堺にあり

ケセルニコウ 波羅泥亞の堺にあり

ユクライ子 波羅泥亞の地にて其一分本國に従ふ

諾勿瓦的亞 北雪際亞に接しナルガ、ラドガ兩湖の間にわたる縣府を建酋長を置て近傍の

州郡を所置せしむ

カルガボル 白海に際すノホゴロド諾勿瓦的亞に附屬す

トウイナ杜亦掌 杜勿拿河の白海に注く河口の邊にあり今アルカンゲルに縣府をたつ

縛羅答 アルカンゲルに附屬す

ニスノホゴロド ナカ河の勿爾瓦河に合する所にあり今別に酋長を置く

モルドア トン、オカ兩河の間にあり

ボル 韃靼塚にあり其地甚廣大なり

レサン 南小韃靼に接す地極て豊饒なり

ウテロチン 韃靼の塚にあり

東魯西亞 此地分て七道と爲す所謂 メワセン ペトソラ ヤレンスキ 白爾米牙<sup>ベルミヤ</sup> ユス

トユク ウイアトスキ ケセルミワシ

メワセン 北海氷海に臨む多く不毛の地也但林木多し

ペトソラ 地氷海に際しワイカットの海峡に臨む地廣く多くは茂林にして人居まれ也氣候

極寒く河海氷凍周年解けすアルカングルに附屬す

ヤレンスキ 其地多くは峻山茂林皮革を以て賦税に充り

白爾米牙 シベリイと壤を接す謨斯可烏を去る事二百三十里許海を煮て鹽を製す是を以て

生産を爲す者二萬人

ユストユク 杜亦拿<sup>トウイナ</sup>河岸にあり此地も亦多く茂林のみ也杜亦拿河沿岸にのみ人居あり

ウイアトスキ カサンに附屬す

カサン 此地は勿爾瓦河邊にあり加馬河此地の中分を流て勿爾瓦河に入る此兩河相合せて曲尺の狀を爲す此土の人他の韃子に比すれば稍禮節を解す地肥沃にして民物豐饒也舊此地に君長ありしか千五百五十二年天文廿二年に魯西亞に奪はれたり其後縣府をたて酋長を置漸々に土地をひろめ舊のカサンに比すれば數倍の地となれり又アルガルの地はもと度爾格の所轄なりしを其酋長帥を逐て今はカサンの所屬となる

カサン 卽ち此地の首縣にして市街屋室頗る華整也勿爾瓦河より黒海に貨物を運送して度爾格と大交易を爲す土人は本國の人と韃子と雜り居り其城郭は石にて砌成し其他の人家築柵は皆木を用ひて造り成す寺觀五十所皆石にて造る千七百四十九年寶曆元年五十二年寶曆六年年明和三年大火にて人家悉く燒失せり

コサイスク 勿爾瓦河岸にあり

マルメイス カサンの西にあり

サマラ サマラといふ河岸にあり勿爾瓦河の支派なり

キムラ 勿爾瓦河岸にあり

ケセルミワシ 韃靼塚にあり土人もつとも射を善くす

魯西亞 蠟皮亞<sup>ラフシト</sup> 此地の説は雪際亞の下に載す此には白海の沿岸魯西亞に屬したる三州を

擧ぐ皆アルカンドルの酋長に隸す

ムレマンスコイ、レポリイ ラルスコイ、レポリイ ヘラモンスコイ、レポリイ 以上歐羅

巴洲に係る

魯西亞 韃靼 此地は亞細亞洲の北境にて近時魯西亞の吞併せしなり

小韃靼 歐羅巴度爾格<sup>トルコ</sup>に屬す故に其説も亦度爾格の下に詳にす大韃靼北境の地は今皆魯西

亞に屬するによりて改て總稱して魯西亞韃靼といふ

魯西亞吞併の地亞細亞に係る者却て歐羅巴に在者よりも廣大也東西凡千六百餘里南北八百餘里其風土も一様ならず南方の地は歐羅巴の風土に似て地も又頗る肥沃也其北方及ひ東北の地は多く山林曠原にて不毛の地多しシベリの條に説所の如し然此地の廣大なる事は左の各地を併せて推はかるへじ其内本國より縣府を建置する所は初に説し十二所の内以下の四所なり所謂 カサン オーレンベルグ 亞私太蠟甘 シベリ 此外高葛砂山北脚の地なり

ブルガル 加馬河の近傍に有 カサンの西二十里小邑也

ビイロイセル シンビルスキ セイルサン サラトウ 皆勿爾瓦沿岸に有小邑なり

オレンベルグ 今魯西亞より縣府を建たる地は舊ユハの有也其地はカサンに接し加馬河ユラル山勿爾瓦河の間に有其北をユヒミといひ南をハシキリといふ其土俗は韃子中の尤勇猛なるもの也長き白<sup>ウ</sup>哆<sup>ヤ</sup>□<sup>シ</sup>呢の服を著僧帽を頂にかけ冬は頭に戴く常に弓箭を帶馬に乗る佛教及び回々教を奉崇す今は魯西亞より天教を布きひろめて寺をも多く建たりと也人家は多くユハ河岸に沿て居り獸畜を豢養する事を産業とす土産は諸穀蠟皮革猪甚多し俗女色を愛し其馬六七頭を以て一妾に換ゆ千七百三十五年<sup>享保</sup>廿<sup>年</sup>に女帝アナ縣府を建て酋長を置又教導官を進而正教をひろめ土人の傲□なる風俗を制禦せしめらるゝといふ

ユハ ユハ河岸に有ボルシンスコイ オルセノイ 並にヤイク河邊にあり木柵を以て周圍のかためをなす

コンガル 此地に大なる地窖有り人居の如し實に天造也甚奇觀とす此地に大山有ユラルと名く多く玉石瑪瑙の屬を産す

亞私太蠟甘 地は北高海岸勿爾瓦の河口に有千五百五十四年<sup>天文廿三</sup>魯西亞に併せらる其地頗る豐饒也此地の瓜味甚美なりペテル帝レイン、ムーセルより葡萄を移し植て今甚繁衍す其西の方黒海によりたる所は皆沙地にて鹽を涌出す太陽に晒でれて自然に結成し全く煎鍊によらず光明透徹水晶の如くして其價も甚貴からず

又一種の奇卉を産すシカーブスコイト<sup>此語羊草と譯す</sup>と言莖を抽て實を結ふ其狀宛として羊の如し

其皮に毛を生ず且其近傍の草皆獸の囓たる如くなる其實を割は赤汁有て血の如し味蝦に似たり又勿爾瓦河の高河に注く河口にてステウルといふ魚を捕へり其子を加非亞爾と云魯西亞語にてイクリと言諸邦に販賣す最も廣大なる交易也一年和蘭人一人にて八萬レイキス  
ダールデル <sup>金錢の名掛敷のイクリを買たる事ありき</sup>

亞私太蠟甘 即ち此地の首縣也勿爾瓦河口ドルコといふ島に有人居稠密にして都城の周圍一里許多く敵樓をたて要害嚴重にしてしかも宏麗華美甚美觀とす城門十六圍すに石疊を以てす北極四十六度廿二分の地にて氣候極て冷六七月と雖共暑を覺えず冬は沍寒最甚く勿爾瓦の如き最大の河なれ共一面氷凍堅凝して車馬にて渡るへし常に度爾格亞爾默泥亞百爾亞

印度等の人此地に聚り交易をなす故に百貨駢集り人烟輻湊して第一般富の地也土人は鹽を以て交易の貨物となす

カリセイン 勿爾河岸ウチルカの山上に有木柵を以て城を爲す

カラスノイヤル ワケルノイヤル 並に勿爾瓦河岸に有

ヤイク ヤイク河岸に在り打魚を以て産業となす又カヒヤールを以て交易をなす此地ハド

ン、勿爾瓦兩大河の間に有舊ヲフテカミシンガといふ小流有一はドン河に入り一は勿爾瓦

河に注ぐ其間わづかに二里許を隔つ千七百年年元錄十三年にペテル帝此兩河を鑿通しペテルス

ベルクのヲドガ湖より船を發しウナルゴコハ河を諾勿瓦的亞に渡りテウエルより勿爾瓦河

に出新河道よりドン河に入り夫よりアソウに至り黑海を渡り公期當丁那令コンスタンチンポリス度爵格のニ抵り地

中海を過き巴爾德峽キアラルの界地中海の海口なり歐羅巴亞弗利加二大洲より諸厄里亞子イギリズーデルランドの海峡を踰てメナルド

海ニ出ソレド灣より窩々所カ、ヌヂセ德海に入て再ひペテルベルグニ歸ル其間迂曲轉回船路凡四千百

餘里三年を経て一週せり此船路のひらけしより歐羅巴諸國更易の便りを得し事古に百倍す

皆ペトル帝の賜に出

## シベリ 名義 幅員 隣界

羅甸にてシベリアといふもシビルと言語の轉したる也シビルは此邦の首縣古名にて其地はトポルスキの南の方魯西亞と阿比河の間南北二百餘里東西百六十餘里の所をシベリと稱せし也今は亞細亞の北邊大韃靼大半の地を總稱してシベリと言北は氷海に際し西は魯西亞に接し東は直に大東洋に至る即亞細亞の盡頭にて亞墨利加と界をなせる海峽也南は支那特立韃靼に壤を交東西凡一千四百余里南北六百余里也古魯西亞韃靼と稱せしは歐羅巴の堺魯西亞の本國に附近の地のみなりしか漸々に侵掠して今は此地迄悉く本國に服屬せしにより總稱して魯西亞韃靼といふ

## 河

魯西亞本國に係れる河々は既に上に詳にす此には其所屬の地に在る夫を説く

エニセイ河 一名エニセア河阿比河の東貳百餘里に在北の方氷海に注く其中飛泉九所有韃靼にてケムと言エニセイスコイノ邊より河身甚濶大にて秋に至り水涸る時に廣さ五百七十托西洋の一托は七尺にあたる春夏の間水の漲り發する時は八百托に及ぶ河中魚蝦極めて多し其味他方のも



のに比すれば甚美なりしとぞ

レナ河 迂曲して遠く流るゝ事三四百里語の方氷海に注ぐ河中に巖石沙礁多く甚險艱にして渡り易からず河口の所は常に氷凝す

アナデル河 カムシカツトカの北に在聖多默峯セントトーマスの東より大東洋に注ぐ

黒龍江 一名アマル又アムウル又サガリインといふ其河口の東の方にサガリイン島有遠流八百餘里魚蝦もつとも夥く舟にて渡るへし

### 風土

此地甚廣大にて氣候も一様ならず南の方並に西南の方は地頗る肥沃也北方及東北の方は多く峻山曠原にて磽确不毛也亦果實を産する故に土人は只打魚狩獵のみを産業とす北方は地氣極て互寒一歳のうち多くは冬の氣候にて河水常に氷り地上に積雪たへす夏の氣候は少しの間也其頃は雪消にて地上の泥土貳尺餘なる所有雷は甚たまれも多く材木を産すされ共極北の方は荆棘叢雜なるのみにて絶て喬木なし南の方は畜産尤盛也牛馬羊野羊等あり又諸穀を産す年毎に北方の諸州に轉送す其外野鳥野獸の類甚多し皆食料に充つ鹿野羊羚羊レーン

エラレツレンザイル野猪兎狼黑白熊玄狐又狐の背上に黒き十文字あるもの有サベルス、ペ  
 ルメレイエン、マルテルス、ウエーセルチイス、エーキホールン水牛ロツセン、ウエクテ  
 ンピサムス麝獸等あり又多く皮革を出す就中玄狐サベスは此州の名品とす土産の皮革は本  
 國に輸し夫より歐羅巴の諸國に販く價も亦甚貴し此地をは本國にても甚怖敷土地にして死  
 罪の者又は戦闘にて捕にせし人などを遣しサベルス、マルテルス、ウエセルス等を捕しめ  
 夫にて食料をも給する也尤獸を捕る定數あり其首長日々に點檢して數の足らざる者には罰  
 を加ふる也其土地廣大なる故其土俗同しからず本國の人も多く來り居る也土産密蠟牛脂ベ  
 ーフルゲール皮革等を以て支那特立韃靼及亞爾默泥亞等の人と大交易をなす

## 併有

前時は此地を曠漠韃靼と稱して本國よりさのみ心をよせず近隣の強盛なる國々に服従して  
 居たりし也ペテル帝の時に至りて阿比河より以東大韃靼東北の盡頭大東洋に至る迄悉く吞  
 併し給ふ其初百餘年前フトル王の頃より舊のシベリの地はすてに本國に腹屬せし也夫よ  
 りたへて東の方を侵掠してやまず但東南モンゴル即ち蒙古の地は既に支那に服従すよりて千六

百八十九年元祿二年に其堺に城郭を築きて固をなす其他の地は悉くペトル帝の時に本國に従ひし也又千七百二十五年享保十年に船司加比丹ベリング、スハーンベルグ、ツキリコウ三人に命じて此地の圖志を造らしむペテル帝崩して後千七百三十年享保十年女帝アナの時に至りて其圖始て成れり夫々以來地形の曲折も明白に成て多國ちをひらき支那カムシカツトカ等への往來の路程も詳審を得て行路も安穩に成たるなり

## 分界

此邦の大酋長はトボルスキの府城に居るもの次なるものはエニセイスコイとイルクツキとに置よりて分て三州となす

トボルマキ エニセイスコイ イルクケキ

各州また數道を分ち郡縣を建つ且ろれくに首帥を置いて理めしむ其各道の地は著しきものみを下に載す

トボルマキ 舊シベリの祖國也魯西亞の東堺に隣る其地の大河をトボル河といふ是を以て其國に名付たる也

トボルスキ 即ち此地の首縣也トボル河邊に在北極五十八度十二分の地也府城をは山上に建たりシペリの大酋長此地に居る千五百五十年天文十にたてたる城也入爾馬泥亞の學校有支那印度等に交易の商賣等此地に會し防寇軍の防寇軍番呼カ護送を得て往來する故に常に此所に輻湊し珍奇の貨物あつまらざるものなく土地尤殷富にて糧食殊に賤き故土人は産業を勉めずして衣食に乏しき事なしと也

チユリンスキ チエラ河岸に在木柵を以て城となす人居三百餘家 ベレソウ 阿比河岸にありワリーカットの海灣に臨亦木柵を以て城を爲す

カタリ子ンベルグ 千七百二十三年享保八年にペテル帝創て縣府を置千七百三十六年元文元年に女帝

カタリナの時に至て落城す依て其地に名付くイセツト河其地に在時の河水漲り溢れて患をなす故に兩岸に堤を築て是を防く此地鐵山有此邦第一の鑛にて夥しく人夫も集り常に繁盛なる地なり又病院學院客殿等あり

ナレイン 阿比河岸に在北極五十九度の地也木柵を以て城堡となす

トムスキ トム河の阿比河に注く河口に在縣府をたて首長を置此所より防寇軍を出して支

那の貨物を護斯可鳥に輸又葛爾莫奇と互市の大傷有

クス子スウ レム河岸に在此地のビイル酒<sup>名</sup>の尤上好也又燻耐を出す枯魚を以て食に充つナ

レイム以下の三所千七百二十六年<sup>享保十</sup>よりトボルススキに屬す

ハラバ 阿比、イルチス兩河の間に在千七百九年<sup>享永</sup>に雪際亞を併せて其餘兵と並に擄掠せ

る士卒とをシベリに遣千七百二十一年<sup>享保</sup>迄の間を多く此邦併せ得たり

エニセイスキ トボルススキの東にありエニセイ河此地の中分を流れて氷海に入る故に其地

に名付く北ハサライデン也千五百九十四年<sup>文祿</sup>より六年迄の間和蘭の人東北より印度地方

に通する道を求めんとて始て此地に至りし也地は北極規内に係りて極て沍寒也エニセイレ

ナ兩河の間にわたる人物は甚殊異也極めて矮短にして醜陋なる道言へからず面色焦黄に目

長く頬は膨脹して氣を含みたる如し夏は魚皮を朋とし冬は獸皮をまると一枚のまゝにて身に

まどふ也婦人も同じ土穴の内にすみ常に剛人を以て臘臍獸を捕枯魚獸肉を食とす又一種の

夷人有トングシ河邊に居る故に即ちトングシと稱す人物中分の大きにて面色黄に鼻ひらき

目小也小兒の内より面上青黒の索を以て皮を縫て文をなす小兒甚くるしみて號哭する也古

は惣身に右の如くせしと也尤其任方に甚工拙あり土人は皆天教を奉しいまた佛教ある事をしらす大抵一夫兩婦或は三四人に及ふもの有居所は甚た小にして彼此に遷移するに便にす性極て勇悍也常に狗肉を嗜ミレンジイルの皮を衣とす今皆本國に従ふ産する所の皮革甚美也以て交易の貨物とす

エンセイスキ 即ち此地の首縣にて北極五十八度の地也エンセイ河邊に在府城は千七百二十三年に<sup>享保十</sup>新に建たる處也武庫火藥庫有土人は愚陋懦弱にて酒を好み産業をつとめす多く黴瘡を患ふ

カラスノイヤルスキ ユニセイ河邊に在馬牛羊を産す交易して糧食を得地肥沃なれ共其人農耕をつとめす

イルタツキ シベリ 三州の内此地尤廣大也東は直に大東洋に際す千六百四十四<sup>正保</sup>本國に從ふ此地に一種の夷人有ヤクテンといふレナ河岸に沿て居る木枝を編て六角に小屋を造りて住む牛馬羊を養ふ衣服は本國の服に似たり男子は髪をうり女子は髻を縮ね狗を豢てサベルを捕へ皮をとりて貨物となす性甚猛悍強暴獸肉及ひ蒜を食とす肉は何にかきらす得る

に隨て食ふ殊に鼠とモルメルデーレンを嗜む

イルクスキ 此州の首縣也本國より置所の首長此地に居る人家千餘城上には大銃十六門を設く本國の商賈常に此國に来て支那の貨物を買易すへて他邦の貨物此地にては本國よりも格別に價いやしき也土人は甚儒にして亦酒を好む

イリムスキ イリム河岸に在北極五十八度の地也土地甚だ豊饒人民繁盛にして極て殷富也南に大湖ありバイカル湖といふ多くサベルを産す又湖中に諸島多く所に温泉有此湖中のサベルは黒色なり

ブラチ アンガラ河邊に在本國の人多く來りてあり駝と牛とを以て大交易をなす

セリンギンスキ セレンガ河邊に在千六百六十六年寛文六年に城郭を築き支那韃靼と疆を圍め多く倉廩五ヶ所火藥及器械の庫を建てたり周圍皆山にて五穀に宜しからず

エヂンスキユバ 河岸に在流てセリンガ河注く東南は支那の堺に接す此地諸穀豊饒にて價も極ていやし

ユルシンスキ 黒龍江の岸に在北極五十二度の地也千六百八十九年元祿二年に城郭を築き支那

と疆を圍め此所より北京と交禮の使節を通す

ヤクツキ レナ河邊に在北極六十一度木柵を以て城をなす其地魚蝦尤盛也土地田畑によるしけれ共土人は農業を事とせずカムシカツトカはもと此地の所轄なりしか今はオコツコイの首帥に屬す

オレフクミンスキ

ウエチンスキ 並にレナ河の南方に在

オコツコイ 其地廣大なる事シベリ東北諸州の最とす其北は氷海に至り南はカムシカツトガ海に臨む土人は佛教を奉す其首帥は北極五十九度ペテルスベルグより百十二度五十三分東にあたる此所に舟匠を置船を造りてカムシガツトカに渡る

ユカゲリ 氷海沿岸に在

ツク、ツギ シベリ東北隅に在土人皆願に鯨齒を樹小兒の時よく其孔を穿つ

オルトルスキ カムシカツトカの東南に在此地尙本國に服従せず時々拒敵せしか年々に近隣の諸州本國に服屬するによりて今は賦税をも出す事に成たり



コレイキ ベンシンスキの灣上に在其地甚廣し土人常に其居所を遷移し定住の所なし其俗尤猛勇にして暴戾也人死すれば其屍を焚くレンザイルを多く産す年毎に壹萬貳千を貢す

ユデズキ 北極五十五度三十分ユデ河岸に在支那と堺を接す

ア克蘭スキ ベンシン河岸に在北極六十三度三十分にあたる

アナジルスキ 東北隅アナジル河岸に在北極六十六度尙未だ全く本國に服従せず此地の盡頭に大なる半島あり三面環海して一面陸に續たる地を言なりイルクツキの屬にてカムシカットカと言其地に大河有

カムシカットカ河といふ北極五十六度三十分の地より流て大東洋に注ぐ故に其地に名付たる也日本にて奥蝦夷と稱せし地也北はシベリ堺を接す又五十九度三十分の地にプスクヤといふ河有西に流てベンシンスカヤの海灣に注ぐ此所のわたり甚せまし晴たる日には其中地にある山を東の海濱よりも西の海濱よりも見るといふ南北わたり貳百四十里其南末□の所はクルリスカヤロハチカといふ北極五十一度三分の地也ベテル帝の建てられしベテルベルクの都より八百二十七度東に當る此地は甚た山多し中分の地は一帶連綿して皆山也しかも石山にて不毛の地也中に三つの火山あり昔しより常に烟を吐き又時に焰を出し灰を飛す一

つをアハシンスカヤといひ一つをチユルバジンスカヤ一つをカムシカツトカといふ此山絶て高し晴たる日は六十里の外に見ゆる山の脚圍り十萬五千丈八千一里四十間餘此山年に兩三度灰を噴

出す事あり時に因て多少あり多き時は八十里四方に灰をふらし深さも二尺餘に至る千七百

三十年文元二年に大きに焼出て石及種々の色なる硝子を吹出せし事有又温泉極て多し海邊の山

脚より出て池となる一里計りの程小き石山に沿て流れ海に入る其深さ四尺あまり廣さ二丈

餘又沸騰しておびたゞ敷鳴響くあり又聲をあけて呼れは濃き烟を起して三四丈も隔りたる

所は見えざる様に成も有温泉の水面に黒きものうきたる有手杯につけは洗てもおち難し

地震海嘯ツツミは度々あり火山のあたりはわけて強きと也氣候は一年の内八月は冬也南の方は常

に雪の深さ大抵一丈一二尺北の方は却て雪なし夏の氣候は甚短し故に五穀を生せず但子一

デルホルト、カムシカツト河は烟をも作る有雷は甚稀也風浪は常にあれてすさまじき也鹽

と鐵とは絶てなき故甚高價也土人皮革及び魚蠟にて大に富を致す者有元來カムシカツトカ

は蒙古より衆を植し地也黒龍江の邊より衆を移したる也其人甚長大ならず色は赤黒く髪

毛黒くして直し面潤く鼻尖り目深く眉うすし垂たる腹廣き肩手脚は疲たり皆沿海の所に住

ひ其飲食は極て穢し豢たる狗の物くひたる器を其儘清むる事もせず用る也居所は土を四五尺掘て其上に柱を四本たて屋根を造り土或は草にておほふ上に四角なる穴を穿て烟出し明りとり出入口にかね用る也打魚蠟を業とせり衣服は獸皮を用ゆ家具は石或は鯨の骨獸の骨等を以て木をほりくぼめ血鉢の如くにして用る也魯西亞より來る外は鐵並に其外の金類も見たる事もなき也犬を多く豢て旅行の時に雪車ツリを引する也妻は何れも二人三人宛もつ也密夫奸通は常の事に成たる風俗也もし學生フダクなれば必ず其一を殺す以前ハ土人尤野鄙愚陋なりしか本國に服從して後千七百四十一年寛永元年女帝の命にて追々に天の會士等を遣はし土人を教導せしむるによりて日々月々に教化も行れ道理もひらけたれば遠からず有道善良の民と成べし又一種の夷人有クリレルスといふカムシカット南岸近傍の嶋々に住む大抵カムシカットの人物に同じ但し其總身に毛を生ずるを異なりとす女子は唇を黒くし男子は只唇のまん中のみを黒くする男女ともに耳に銀環をかけ肘より腕までの間に種々の模様をいれすみする也衣服と居所はカムシカットに同じ飲食等は却てきれいなる方也魚肉及び海獸の肉を食物とす姦夫をハ嚴敷罪に行ふ祭る所の神をインコウルといふ是を祭るに木を

らすくけつりよりかけて幣の如くし獸を殺し皮を取て備へ祭る肉をば食用とす人死すれば冬は雪の中に埋み夏は土中に葬る魯西亞の此地を得たるは千六百九十八年元禄十一年アタラツ

ソ一軍を帥ひコノサツケンユガグリ及コレーキより此地に至り土人を大半服従せしめて千七百年元禄十年の七月に本國に歸る其得たる所サベルの皮三千貳百張ベールラツコなるべし七十七

獺四灰白毛の狐皮十張赤狐九十一を帝に獻し目所得再サベル皮四百張也其後千七百十五年正徳五年に再軍勢を起しベンシンスコイ海灣よりカムシカツトカに渡り其地は勿論近傍の諸嶋迄打從へたり然るに千七百卅年享保十年土人魯西亞に叛きて敵對せしか程なく靜謐に成て今

に至る迄も無事に治りたる也賦税は年毎に人々サベル、ペール、狐右三品の皮何にても一張宛出す事也此地に魯西亞の小城五座有一をボルスケレツコイといふボルスカヤといふ大河の側に在ベンシンスカヤの海灣を去る事三十三ウエルステン一ウエルステン三城の大さ四方四十九丈オコツコイ通商の舶先此地に來り集る故に甚繁盛なる地也二をチツブルホルトカムシカツトカといふ五ヶ所の内此城最も古しカムシカツトカ河源を去る事六十九ウエルステンホルスケレツコイの北二百四十一ウエルステンにあり倉廩武庫を設く三を子ーテル

ホルトカムシカツトカといふチツプルホルトの即位三百九十七ウエルステンカムシカツト河口を去る事三十ウエルステン城の廣さ方二十八丈周りに木柵を構ふ四をアワツカといふ千七百四十年元年に建アハツカ河の港口に在五ウをデキルといふ近頃キ建たる城也河邊に在此地の屬島極て多し著者キを左に擧ぐクルリス諸嶋カムシカツトの南岸に起り西南の方に連綿して散在すき者二十五嶋其瑣々たるものは數をしらすカムシカツトカに附近の島とは魯西亞に従へ共遠くはなれたる島々はをのく首長有て理ると見ゆる也其地地震多く又火山有日本と交易を専らにすに日本近傍の島々に一種の毒草を生ず其根大さ大黃の如く邑黃にして洎夫藍色の如し矢にぬりて獸を毒すユルプといふ島にてフラント子ツテル艾の類を以織て布をり日本人と木綿鐵器に交易す又一大島あり其南の端を松前といふ往昔より日本王城郭縣邑をたて置給ふ又カムシカツトカよりの海路にクナジク島在ユルプ以下の三島日本人すべて蝦夷と稱す

ベリングス島 大東洋のうち在カムシカツトカ河口を去事六拾餘里なり千七百四十二年寫保元年船司加比丹ベルングス始て此地に至り其年八月此地に卒す故に其名を以て此地に名付

廣さ四十五里許高さは甘ウエルステン皆黒き堅緻なる石なり地震多し晴たる日に此島より北にあたり雪山を見る高さ測るに四百九千丈是北亞墨利加の山なるへし

ヂナメテス島北極六十七度の地なり

聖老楞祖島<sup>セントラウレンス</sup> 亞細亞の東北隅に當る千七百二十八年にベリンググ始て此地に至る然れ共絶て

人なき故其後再び其地に至らずベリンググスは多くの島々を開きたるのみならず北亞墨利加の西邊北極六十度の地を開き得たり其後ツキルコウなる者又北亞墨利加の西邊六十五度の地を開く又千七百六十三年<sup>寶曆十三年</sup>に本國の船を發し氷海を越てク、ツキの北盡頭七十四度

の地を歴て又南に向ひ一の海峡を渡る是北亞墨利加の西塙と亞細亞の東北盡頭との海峡なり又六十四度の海上にて多くの島々を開き得其土人に教て皮革を製して交易をなさしむべリグシ島に總司を置て是を所置せしむ其島々を總稱してアルク、ト諸島と云北亞墨利加亞に屬せし地なり此海峡を得てより後は常に此海路を往來する事なり此所にては兩大洲の間縁に六十里許隔て其内に多く島々有故大船にては渡るへからず且亞墨利加の人も今は歐羅巴の教化にて昔の如く殊異不倫の俗にもあらざれば小船を用ともさのみ怖るへき事もあら

さるなり上に説如く近來大韃靼シベリ及ビ東方諸國に通ずる海路を開き得て魯西亞の氷海より船を發しシベリの海岸に沿て遠くカムシカツトカに至り初て新增白蠟の島なる事を明白に知り得たり但此海路もつとも艱險也氣候極めて寒く常に層氷とけず又潮勢きはめてあらく異風變亂やゝもすれば全船齏粉となる只海路のみならずシベリの瀕海の地は時々風濤の爲に害を受ける事ありといふ

高葛沙山脚の地は北高海と黒海との間に亞細亞歐羅巴分界の所に在トン河に際し熱阿爾入亞シアに接す地勢方形にして縱橫三百許里大小韃靼より互に衆を植し地也千七百二十二年享保七年ベテル帝此地併せ得給へり

止爾加シムカセイ止印 幅員百二十餘里壹分は魯西亞に従ひ一分は契利牟キリムに屬す土俗は田獵農耕を業とし又畜産をやしなふ此地の婦人極めて美麗にして常に新様の衣裝を製し粧ひ飾り回々教法を奉崇す又其馬を産すもつとも健俊也價もまた甚貴し

クバン アソウの西隔にありと度爾格の所屬に魯西亞にて手にあまりし也ベテル帝の時より女帝アナの時千七百三十年享保十五年に強て服從せしめたり

カハルチ子<sup>ン</sup> 亞私太蠟甘<sup>ヤスマタラカシ</sup>の近傍に在大小二部に分つ

タダスタン 北高海岸に在百爾西亞<sup>ハルシヤ</sup>と壤を接す土人回々教を奉崇す此地にて本國と百爾西亞と大交易をなすもの貨物は北高海より船にて轉輸するなり

### 魯西亞人物

其人長大にして容儀端正也其性恭敬和順にしてしかも勇壯果敢事に臨みて動せず飲食は蕪<sup>カ</sup>菁<sup>フツ</sup>青菜麥葱<sup>キウソウ</sup>胡瓜魚蝦の屬燒酎を常の飲ものとす午膳の後晝寢數刻又温湯に浴し幼弱のものは歩行せしめて食を消せしむ常人は烟草を喫せず只鼻烟を用ゆ軍人は烟草を喫すへて燒酎およひつよき酒を嗜む常に閑居事なきを好まず他邦に往て事を執しひる者の如き篤實至誠死に至るまで變せざるものを撰み用う六十餘年異邦を偏歴して猶歸らざるものあり其事をどげされはやますよく其事を成得たるものは尤重く舉用ひらるゝ事也服は入爾馬泥亞拂<sup>セルマニヤフ</sup>郎察<sup>ランサ</sup>の制を用ひ最華美整楚也常人の服は麗布をもちゆ賤人は髭を剃らず家毎に浴湯を設く行路は互に禮讓を専らにし屋室器用は多く匱也但□寶等の事は詳ならず言語はハストラホニヤの語より轉したる也今は厄力西亞<sup>グリュキヤ</sup>語を雜へ用う文字は二十四字有往來魯西亞に航海の事



のなかりし也ペテル帝の時よりつとめて航海の法を訓練せしめ其術に委しくなれり其後女帝アナの時に至りて水戦陸戦ともに其法に熟練せしは度爾格韃韃等の強敵と數度交戦し黒海サバチセ海の大戦を経てより其法を得たりし也然れ共千七百三十九年に元文四年凱旋せし時再元文四年此海に吾國船をは出さしと言しと也女帝アナ崩する時に種々制令を遺勅し女帝エリサベトの時に至りて國風を改め古俗を易て新政を布きほどこし給ひてより風俗も格別に善良に移り當今女帝カタリナに至りて漸々に土地も廣まり教化も日に益さかり也古は婦人の服甚たれかしげなりしにペトル帝入爾馬泥亞の服を用ひ其風俗を學はしむ但白粉をもちひす面色のあかきを以て美なりとす

教法

尼力西亞の教法を奉して千五百七七年に永正四年尼力西亞の教化主を迎へて謨斯可鳥に殿堂をたつ小兒に名を付る法はロイヤ邏馬人の如し但し其兒の頭上より水を灌かす全身を水に浸すを異なりとす年長の人の他教を捨て名を改るには先行教の法旨を聽く事四十二日其後前の教法を改る也時に其人を倒にして吐に至り古き教法を捨て此條詳ならず強て解するのみ貴まざるしとす其後本

當時耶蘇教は  
精府の嚴禁な  
れは諱て省け  
るなり

國の服を衣せ頭に油をぬり蠟燭を手に捧げしむ夫より七日の間自己の心魂をねり第八日に  
水に浴して名を改る是也も亦ペテル帝より其法を改めて天教を奉崇せられしより以來又其  
法を易る事なし以下一向に解し  
かたし姑國之

習業

算數書法を學ぶ事を専らとすペテル帝の時に歐羅巴諸國より有名の學士を迎へ謨斯可鳥に  
學校を建て生徒を教導せしむ又各國の言語を教へ年幼の者には先度數の學をなさしむ猶其  
學業の永久に盛りならん事を思ひてキチウ及びヒテスベルグに學校を建多く書肆を設け  
諸國の典籍をあつめ大道に合し人心に益ある書をは悉く國語に譯して刊行せしむ又千七百  
二十四年享保九年正月に入爾馬泥雪際亞拂郎機フランスより幣禮を厚くして有名の師儒を迎へ御庫の書  
二千部を出し其内より採撫して百藝究理の書を編せらる又百工の作院を設け其業を習は  
しめんと企有しがいまだ工をへさる内翌千七百二十五年享保十年に崩し給ふ女帝カタリナ  
即位有て其志をつぎ千七百二十六年享保十一年に學校とぐく成就す其壯麗いはん方もなし  
一歳の費用二萬四千九百十二ルウデルス金錢の名目方なりとす其學四科分つ所謂星學史書學  
等又詳ならず

大抵本國の金  
一兩にあたる

窮理學度數學也年毎に師儒各其生徒を考試して優れる者の姓名を書して奉る又百工の作院には専ら活版の文字を鑄經典を印刷し並に書を綴る事を學はしむ又玉工石工ヒキモノ鐵工其他百工を教習す其費用年毎に貳萬八千三百八十六ルウベルス也兩學校の費用合て五萬三千貳百九十八ルウベルス也此教育に因て學術巧藝其奧妙を得る者日一日よりも盛り也と雖亦ペテルスベルグの學校にも教科教法を守る治科政事に習ふ醫科疾病を療す道科教化を興すの四科を分ち日夜に勵精研究せしめらる千七百四十二年寛保二年に其述作の書目を點視するに醫科道科の書一萬四千百八十七部國事を記したる書貳百八十二部也と雖又千七百十四年正徳四年に寶庫をたて天産人巧の奇品異貨を收貯す草木蟲魚各數百品に下らず始メペテル帝千六百九十八年元禄十一年より和蘭の商人に囑して買得たる也其後に千七百十六年享保元年にアルベルトスサバなるもの禽獸魚蛇蝶の屬金石の類をダンツレフフロイセよりあつめ得たり其他諸國の金銀錢測量窮理の器具等備らざるものなし又千七百三十二年享保十一年にペテル帝の肖像を造りてヒユルドハの戰に用られし夜甲を著せず是を寶庫におさむ其後常に四方の奇品異品を求め集め今に至りては海内の極珍奇にして致し難き物までも悉く收貯せざるはなし

政治 此條官名等詳ならずる故解しがたし只其一二を擧ぐ他は追考すべし

右魯西亞の君長ハルスト軍將なりし中頃ゴロドホルスト大將となる其後カサール王となり

ベテルに至りて始て帝號を稱す實に千七百二十一年享保六年の事也其頃度爾格と帝號を争ひ

しか千七百四十一年享保六年に魯西亞に歸したり當今女帝カタリナは千七百四十四年延享元年

七月五日に降誕ありて千七百六十二年寶曆十一年に即位す

### 兵制

魯西亞帝隨身の兵常に三十萬也千七百三十一年享保十六年女帝アナベテルスベルグに教場を設

け多く軍師を撰みて操練せしむ又ペテル帝窩々所徳海に七十二の戰艦を造りて水軍を準備

す第一等を船九隻每船軍卒五百鳥銃六十第二等の船二十隻每船軍士三百六十銃五十第三等

の船五隻每船軍士二百五十銃四十一第四等の船十九隻每船軍士一百八十銃三十四第五等

の船九隻每船軍士七十二銃二十四火船四隻快船十八隻捕盜船百隻合して軍士萬八千鳥銃二

千五百是を一隊とす本國専ら船を造る事をなす故にベテルスベルグ及びアルカングルに多

く船匠をあつめ夥しく船を造らしむ女帝カタリナの時軍船一百四十隻を造り軍士三萬人を

のす又千七百五十六年に軍船二十四隻快船七隻礮船三隻飛船四隻を造り水軍壹萬を増備ふ  
今又ペテルスベルグにて軍船百餘隻を造り添たりといふ常に二千萬ルウベルスを以て軍資  
に備へ一分は路費に充て一分糧食グステンベルテバヒール鹽藏の物ケイズルレイキトメイ  
子未詳に充て一分は鐵ホツトアス灰汁の類未詳大黃瀝青魚油等の價に充つ

## 交 易

此邦もつとも交易を事とす凡貨物を他邦におくるに先づ本國の貨物を點檢し他邦の風土を  
考て其土の珍重すへき品類を撰みておくり致すを要とす千七百五十六年寶曆六年に交易にて賣  
る所の金高三百五十三萬六百四十四ルーベルスといふ歐羅巴諸國本國と互市する者諳入利得  
を第一とす其交易の法も他邦と異也其次は子ーデルランドハンセステーテン第那馬爾加の地等の交  
をもつとも盛りなりとす其互市の場はペテルスベルグを最とす支那の交易是又夥しき事  
也貨物をおくるに防寇軍を以てすアカラテ契利率百爾西亞等の互市も利を得る事廣大なり  
冬は雪車を以て貨物を轉送す

## 魯西亞志畢

博文館  
大販賣所

東京全全全全全全  
京都 板 屋都

川東松梅柳吉大水上海  
瀨長村原岡倉野田  
律九喜平書慶屋京  
代書兵總兵平書次書  
助房衛七衛助店那店堂

山松全長大博全鹿熊神  
口江 崎分多 島本戶

清川虎鶴山嶺富吉長熊  
水岡野川善山田崎谷  
一號正館仲兵次榮  
三清商書三支  
堂助店店那店吉衛郎堂

青弘仙松長水長金靜廣  
森前台本野原岡澤岡島

鎌野木水西西田雲廣松  
崎村澤村瀬村  
田九琴喜書根  
商兵文太六市管  
店衛助堂那平店堂藏助

版權  
所有

發兌元

博文館

東京日本橋區本石町三丁目

日本橋區本石町三丁目十六番地

編輯者 大橋新太郎  
發行者 岸上操

明治廿四年十月廿二日印刷  
明治廿四年十月廿五日出版

定價

拾三冊	六冊	一冊
前金貳圓五拾錢	前金壹圓卅五錢	金貳拾五錢

錢六冊一稅郵

月一冊發兌	用一割增每	前金郵券代	御注文一切
-------	-------	-------	-------

(文庫)

# 少年文學

毎月一回發兌  
畫數個挿入和裝  
美本每編記事讀  
切完結

正價 ○一冊拾二錢○六冊前金六拾七錢○十二冊前  
金壹圓二十五錢○郵稅一冊四錢宛○注文前金

## 本書目次

- 第一編 かがね丸 嚴谷 謙著 武内桂舟畫
- 第二編 二人むく助 尾崎紅葉著 武内桂舟畫
- 第三編 今辨慶 江見水蔭著 武内桂舟畫
- 第四編 維新三傑 北村紫山著 石版肖像入
- 第五編 雨の日ぐらし 山田美砂著 富田永洗畫
- 第六編 寶の山 川上眉山著 武内桂舟畫
- 第七編 二宮尊徳翁 幸田露伴著 小林永興畫
- 第八編 親の恩 宮崎三味著 小林永興畫
- 第九編 姉と弟 嵯峨のやをむる著

第一高等中學校教授小中村義象 兩先生著  
第一高等中學校教授落合 直文  
松本楓湖揮毫彩  
色密畫挿入毎月  
一回和裝美本每  
編記事讀切完結

# 歴史讀本

正價 ○一冊拾二錢○六冊前金六十七錢○十二冊  
前金一圓二拾五錢○郵稅一冊四錢○御注文前

- 第一編 目次 能褒野の露 (日本武尊之事蹟) 裾野の嵐 (曾我兄弟復讐事蹟)
- 第二編 目次 如意輪堂 (補正行) 泉岳寺 (赤穂藩士復讐事蹟)
- 第三編 目次 小松の雪 (平重盛之事蹟) 鬼界ヶ島 (後醍醐天皇之事蹟)
- 第四編 目次 鳥羽戀塚 (製茶御前之事蹟) 鶴ヶ岡 (靜御前之事蹟)
- 第五編 目次 青葉の笛 (平教盛之事蹟) 日野の若草 (阿新丸之事蹟)
- 森のあらし (森胡丸之事蹟)